

数は、胸腔鏡が開胸に比して有意に短かった。再発は2例、合併症は2例、関連死が1例あった。研修医が43%の手術を行っていた。胸腔鏡手術に関して研修医と上級医で比較してみると、年齢、手術時間、在院日数で有意差は認めなかった。

【結語】大学病院でも市中病院と同じ気胸が経験できた。胸腔鏡手術が気胸術式として有利であった。気胸に対する胸腔鏡手術は、指導医の元で安全な手術であった。

21 虫垂間膜原発の脂肪肉腫の1例

三澤 将史・森 悠一・小野寺真一
須田 和敬・中塚 英樹・西村 淳
河内 保之・新国 恵也・清水 武昭
厚生連長岡中央総合病院外科

症例は25歳男性。

2005年の初め頃より腹部の膨隆を自覚放置していた。2005年8月5日腹痛あり当院内科を受診。腹部に巨大腫瘍を触知したため8月12日当院内科入院となった。CT、MRIにて20cm大の巨大腫瘍をみとめGISTを疑われ、切除目的で外科紹介。8月29日手術施行、手術所見は中下腹部、骨盤腔を占拠する黄色弾性硬の腫瘍が発育していた。腫瘍は回結腸動脈から栄養されており、回盲部切除し腫瘍を摘出した。肉眼的には虫垂間膜原発と考えられた。病理診断は脂肪肉腫であった。腸間膜原発の脂肪肉腫はきわめて稀であり、文献的考察を加えて報告する。

22 著明な皮下気腫を呈した横行結腸穿通による壊死性筋膜炎の1例

松原 洋孝・山崎 俊幸・桑原 史郎
大谷 哲也・片柳 憲雄・山本 睦生
斉藤 英樹

新潟市民病院外科

症例は60歳の男性、平成16年12月20日腹痛を自覚、症状増悪傾向で翌年1月3日当院救急外来受診した。来院時低血圧および頻脈あり、触診上腹部全体に握雪感を認めた。血液検査では白血

球が著明に上昇、CTで胸部から腹部の皮下および筋間に著明な気腫を認めた。同日緊急手術を施行した。術中所見で横行結腸が腹壁に穿通しており、同部から広範に気腫を呈したものと思われた。結腸部分切除術、腹腔および皮下のドレナージ術を施行した。術後は複数回のデブリドマンを要し創治癒に時間がかかったが、第98病日軽快退院した。壊死性筋膜炎はいまだに死亡率が高い疾患である。手術による十分なドレナージはもとより、術後も筋膜炎の範囲に応じ適切なドレナージおよびデブリドマンを行うことが肝要と思われた。

23 横行結腸間膜裂孔ヘルニアの2手術例

滝沢 一泰・鈴木 聡・三科 武
二瓶 幸栄・内藤 哲也・渡邊 真実
松原 要一

鶴岡市立荘内病院外科

内ヘルニアの中でもまれな横行結腸間膜裂孔ヘルニアの2例を経験した。

症例1は81歳、男性で、02年イレウスのため入院。イレウス管で症状の改善を認めなかったため開腹手術を行うと、Treitz靱帯直上の横行結腸間膜にあいた径4cm大の欠損孔から小腸が網膜腔内陥入しており、横行結腸間膜裂孔ヘルニアと診断した。症例2は31歳、女性で、04年8月にイレウスのためイレウス管を留置されたが症状が改善しなかったため、内ヘルニアを疑い開腹手術を行った。するとTreitz靱帯からほぼ全小腸が網膜腔にはまり込んだ横行結腸間膜裂孔ヘルニアであった。2症例とも腸切除は行わなかった。本ヘルニアは内ヘルニアの中でもまれな疾患ではあるが、開腹歴のないイレウスの原因疾患として念頭におく必要がある。